

地域別にみた食品使用頻度の推移

酒井 映子・中野 米子・間瀬 智子・粕谷 尚子・森本 裕子・熊沢 昭子

Trends in Frequency of Use of Food by Regional Groups

Eiko SAKAI, Yoneko NAKANO, Tomoko MASE, Hisako KASUYA,
Yūko MORIMOTO and Akiko KUMAZAWA

緒 言

近年の食品流通の発展に伴って、家庭で使用される食品の地域格差は減少の傾向にあるといわれており¹⁾、また、食品選択行動に関わる要因として経済、生産、流通、生活環境、食習慣、嗜好などがあげられている²⁻⁴⁾。このように、食品摂取の地域の平準化がすすむ一方で、食品選択行動に関わる諸要因が食品使用を多様化させる方向に働いていることも認められている。このような状況をふまえて、家庭で使用される食品の経年的な変化を検討した調査研究は少ない^{5,6)}。そこで、食品使用頻度に関する地域の特性をみるために、同一河川流域の山間部、平野部、海辺部における食品使用の状況およびその経年変化からみた地域間の差異について検討したので報告する。

方 法

調査地域は山間部が矢作川上流の愛知県北設楽郡稲武町、平野部が矢作川中流の同県西加茂郡猿投町（現在は豊田市）、海辺部は矢作川下流の同県幡豆郡一色町とした。調査時期は昭和63年7月であり、家庭における調理担当者への面接によるアンケート調査方法を用いて、過去（ほぼ20年前）と現在の食品使用頻度調査を行った。調査対象数は山間部23名、平野部105名、海辺部92名の合計220名である。取り上げた食品群は日常の食事によく使用されていることや、食品中の栄養素含有量からの分類を考慮するとともに、地域の生産などの面からみて主要な食品と考えられる22食品群とした。食品の使用頻度区分は現在については、「ほとんど毎日」、「1日おき」、「週1~2回」、「月1~2回」、「ほとんど食べない」の5段階評価とし、過去と現在との食品使用頻度の比較については「増えた」、「減った」、「ほとんど変わらない」の3段階評価で集計した。各種の検定は、FORTRAN プログラムによりPC-9801で行った。

経年変化をみるにあたって、過去における食生活状況および食物摂取状況については、昭和35年から昭和37年にかけて実施された矢作川流域の一連の調査結果を参考とした⁷⁻¹¹⁾。調査地域の概要をみると、行政区分では山間部と海辺部の異動はなかったが、平野部の猿投町が豊田市に合併された。山間部の業態区分は過去では林業および農業を営む世帯が多く、現在においても大きな変化はなかった。平野部では昭和40年頃は専業農業または兼業農業世帯が多かったものが、現在は勤労世帯と兼業農業世帯に変わってきていた。海辺部は漁業世帯、農業世帯から現在では勤労世帯が多くなってきていた。食品の流通については、野菜類は山間部では現在でも生産物の自家消費の比率が購入比率よりも高かったが、平野部や海辺部では自家消費がほ

とんどみられなくなっていた。肉類や魚類などの生鮮食品は平野部、海辺部では毎日の購入が可能であるが、山間部では入手が週1~2回の地区もみられた。このように、各地域の食生活をとりまく諸条件には変化がみられた。

結果および考察

1. 現在の食品使用頻度

地域別に食品の使用頻度をみると、図1に示したように、山間部ではバター、貝類、肉類、チーズ・ヨーグルトの使用頻度が平野部、海辺部と比較して低くなっていた。また、海辺部では野菜類のうち果菜類の使用頻度が他の地域よりも低くなっていた。このような地域による使用頻度の違いは、山間部における生鮮食品の流通の発展の遅れや食習慣の相違、海辺部における野菜類の生産など、地域の特性が影響しているものと考えられた。ちなみに、地域別の生産物についてみると、山村地域では鶏肉ブロイラー、山ごぼう、山菜などが主な特産品であり、平野部では果実、野菜類のうちの葉菜類と果菜類など、海辺部では貝類、のりなどの海産物、さつまいも、野菜類のうちの根菜類などがあげられていた。また、食品使用頻度の低い食品類として、各地域ともにチーズ・ヨーグルト、バター、その他のいも、肉加工品類があげられる

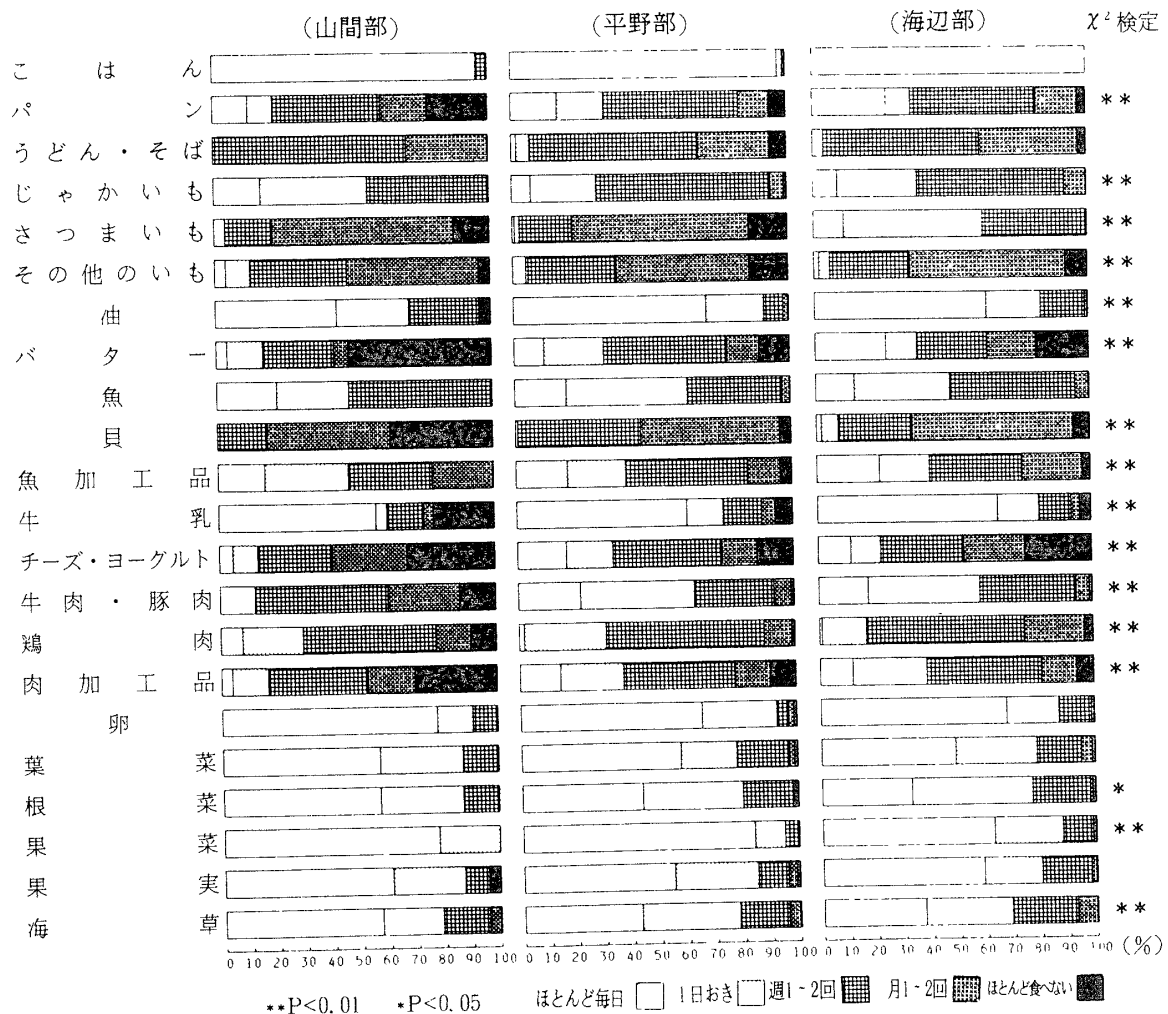


図1 現在の食品使用頻度

が、これらの食品類においても使用頻度は低いながら地域に差のあることが認められた。一方、使用頻度に地域差のみられない食品群として、ごはん、うどん・そば、魚類、卵類、葉菜類、果実類があげられた。

2. 過去と現在の食物摂取状況

食品使用頻度は食物摂取状況をあらわす簡易栄養診断方法の一つとして検討されてきている¹²⁻¹⁵⁾が、食品の種類、食品摂取のバランスなどの質的把握はともかくとして量的把握には設問の仕方によって問題点がみられる。したがって、ここでは、同一対象者ではないが、同一地域における食物摂取状況調査結果を取り上げて、食品摂取量および栄養素摂取量についてみることにした。表1は過去と現在の栄養素摂取量を示したものである。対象が過去は世帯、現在は個人と異なるために成人換算を行った。しかし、摂取量を一概には比較できないので、エネルギー比率からみると、表2に示したように、過去のエネルギー比率は、たん白質エネルギー比が12~14%、脂質エネルギー比が9~11%、糖質エネルギー比が77~80%であった。これに対して、現在のたん白質エネルギー比は15~17%、脂質エネルギー比は23~25%、糖質エネルギー比は60~61%を示していた。このように、たん白質エネルギー比と脂質エネルギー比が高

表1 過去と現在の栄養摂取量

		エネルギー kcal	たん白質 g	脂質 g	糖質 g	カルシウム mg	鉄 mg
過 去	山間部 (稲武町)	2014	62.2	19.8	410.0	297	10.0
	平野部 (猿投町)	1905	57.5	22.3	361.0	311	11.0
	海辺部 (一色町)	1784	62.6	17.5	343.0	307	13.0
現 在	山間部 (稲武町)	1753 (279)	71.3 (13.3)	44.8 (18.0)	257.2 (51.8)	448 (178)	9.4 (2.1)
	平野部 (豊田市)	1791 (387)	65.9 (17.9)	50.5 (24.0)	269.2 (61.1)	445 (192)	10.1 (4.1)
	海辺部 (碧南市)	1715 (299)	69.5 (12.6)	41.8 (17.4)	258.1 (50.8)	433 (166)	9.1 (2.0)

- 注) ①過去の調査は世帯、現在は個人を対象としたものである。
 ②過去は1世帯1日当たり平均値、現在は1人1日当たり平均値。
 尚、現在の下段()は標準偏差。
 ③過去の調査時期：稲武町は昭和35年、猿投町は昭和36年、一色町は昭和37年の各8月。
 現在の調査時期：豊田市、碧南市および稲武町とも昭和63年9月。
 ④過去の調査対象：稲武町165世帯、猿投町105世帯、一色町63世帯。
 現在の調査対象：各地域とも40~69歳の女22名。
 ⑤成人換算率はエネルギー：稲武町0.90、猿投町0.87、一色町0.95
 たん白質：稲武町0.91、猿投町0.95、一色町0.95

表2 過去と現在のエネルギー比率

		たん白質 エネルギー比	脂 質 エネルギー比	糖 質 エネルギー比
過 去	山間部	12.0	8.6	79.4
	平野部	12.3	10.7	77.0
	海辺部	14.1	8.8	77.1
現 在	山間部	16.6	23.5	59.9
	平野部	14.7	25.3	60.0
	海辺部	16.5	22.3	61.2

くなり、糖質エネルギー比が低くなるといった現象は全国的にもみられるところであるが、さらに地域別にみると、山間部での変化率は、平野部や海辺部での変化率と比べて高くなっており、変化の速度には地域による差異が認められた。

過去と現在の食品群別摂取量については表3に示した。過去における食品群別摂取量をみると、穀・いも類の摂取量が多く、乳類と油脂類の摂取量が少ないことが各地域に共通した状況

表3 過去と現在の食品群別摂取量 (単位：g)

		穀・いも	果 実	肉・魚・卵・豆	乳	油 脂	野 菜
過 去	山間部 (稲武町)	1032	20	110	21	3	322
	平野部 (猿投町)	907	205	150	20	7	321
	海辺部 (一色町)	1017	181	174	16	3	297
現 在	山間部 (稲武町)	581 (154)	93 (107)	301 (98)	62 (96)	14 (11)	198 (133)
	平野部 (豊田市)	550 (180)	102 (94)	229 (94)	89 (120)	24 (17)	200 (95)
	海辺部 (碧南市)	583 (153)	97 (115)	286 (85)	53 (92)	13 (11)	205 (131)

注) ①過去の調査は世帯、現在は個人を対象としたものである。

②過去は1世帯1日当たり平均値、現在は1人1日当たり平均値。

尚、現在の下段()は標準偏差。

③穀類はごはんに換算したものである。

④過去の調査時期：稲武町は昭和35年、猿投町は昭和36年、一色町は昭和37年の各8月。

現在の調査時期：豊田市、碧南市および稲武町とも昭和63年9月。

⑤過去の調査対象：稲武町165世帯、猿投町105世帯、一色町63世帯。

現在の調査対象：各地域とも40～69歳の女22名。

であった。地域に差のみられる食品群は、果実類と肉・魚・卵・豆類であったが、山間部ではこれらの摂取量が他の地域と比べて少なかった。これは当時の食品の入手の状況に応じた結果であるものと考えられた。現在の食品群別摂取量は、肉・魚・卵・豆類、乳類および油脂類の摂取量に地域の違いがみられた。特に、平野部では乳類と油脂類の摂取量が他の地域よりも多いことが認められ、また、食物摂取状況の対象者と食品使用頻度の対象者は同一ではないものの、食品使用頻度の状況とも対応していることが認められた。現在と過去の食品群別摂取量を

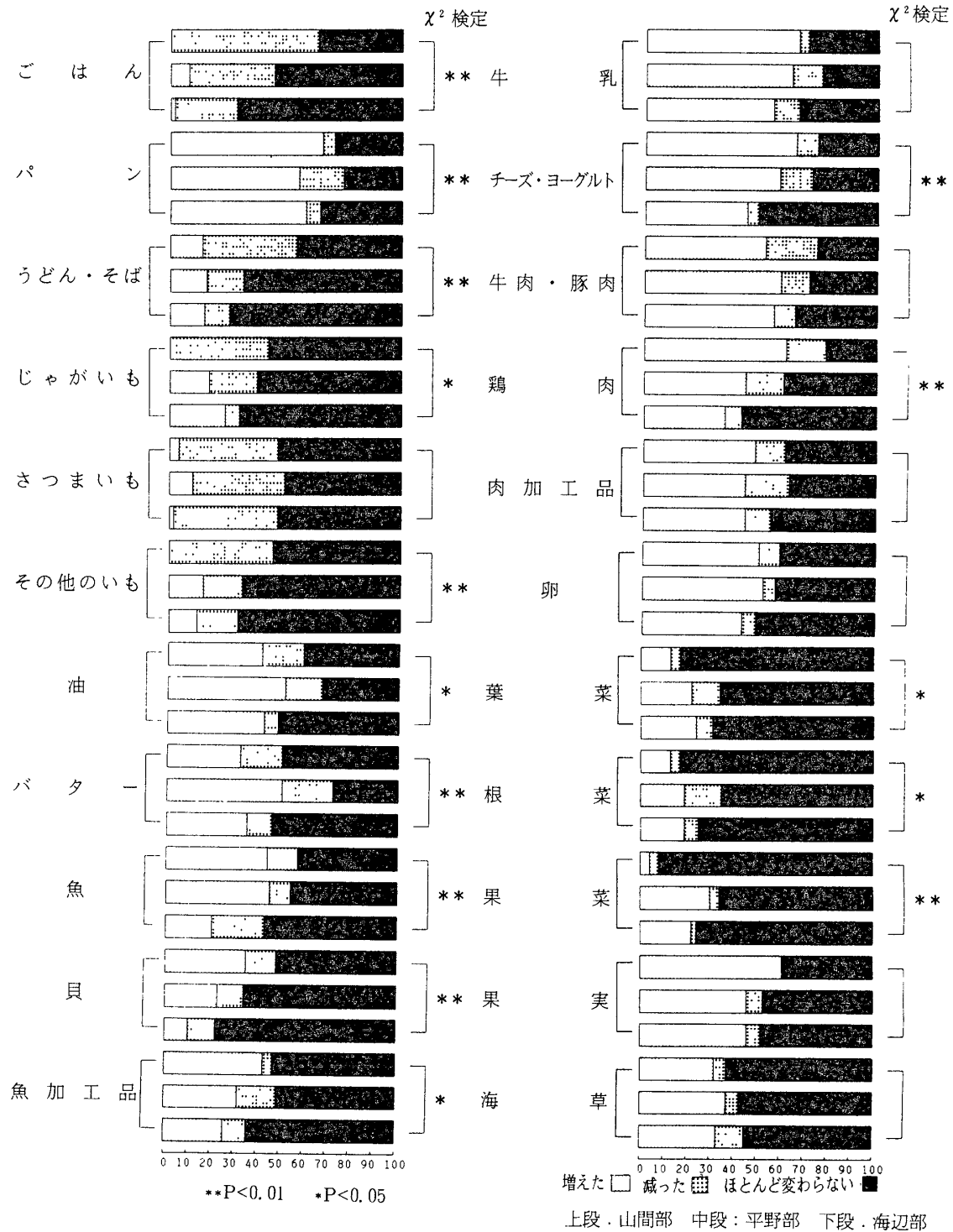


図2 地域別使用食品の変化

比較すると、穀・いも類および野菜類が減少し、肉・魚・卵・豆類、乳類、油脂類、果実類が増加していた。このような食品摂取量の変化は、エネルギー比率でみられた変化を裏付けるものであるが、ここでの結果も同様に、動物性食品の比率が高くなるという変化の速度には地域差のあることが推測された。

3. 食品使用頻度の経年変化

過去と現在の食品使用頻度を比較すると、図2にあらわしたように、各地域ともにごはん、いも類が減少し、パン、肉類、魚類、貝類、卵類、乳類の増加がみられた。穀類における粉食化傾向と動物性食品の増加は国民栄養調査結果¹⁰⁾においても認められる変化である。しかし、その増減比には食品によって、山間部、平野部、海辺部に違いがみられた。すなわち、ごはんの減少比は山間部では64%であるのに対して平野部ではそのほぼ1/2に相当する37%であり、海辺部では27%となっていた。また、魚類の増加率は海辺部では20%であるのに対して平野部と山間部ではほぼ45%であった。また、食品類の内訳から変化の様相をみると、肉類のうち、平野部と海辺部では牛肉・豚肉が55~60%、鶏肉が35~40%増加していたが、山間部ではこの地方の特産品である鶏肉の増加が60%となっており、牛肉・豚肉の50%の増加と比べて著しいことが認められた。野菜類では、平野部においてごぼう、大根などの根菜類が減少し、きゅうり、トマトなどの果菜類が増加しており、他の地域よりもその変化率が大きかった。野菜類におけるこのような変化は、食事の洋風化や柔らかい食品への嗜好などに伴ってあらわれる現象であるが、対象地域のうちでは平野部において最も早く現れており、このことも地域の特性の一つであると考えられた。一方、使用頻度の変化に地域の差がみられない食品群としては、さつまいも、牛乳、牛肉・豚肉、肉加工品、卵類、果実類、海藻類があげられた。

次に、食品使用頻度と増減レベルとの関係を見ると、パンや乳製品の増加方向への変化は、海辺部では使用頻度が「毎日」レベルへ変化した比率が高く、山間部では「週1~2回」および「月1~2回」レベルへの変化が高いことが認められた。平野部では、パンや乳製品の「週1~2回」への減少方向への変化がみられることから、平野部における食品使用頻度の変化が最も早くすすんだことが推察された。

以上のことから、各地域に共通の変化、すなわち、ごはんやいも類などの糖質性食品が減少し、肉類、魚類などの動物性食品は増加するといった現象とともに、鶏肉や果菜類にみられたような生産、経済、文化などの地域の特性を背景とした、地域ごとに異なる変化も認められた。

要 約

地域別に山間部、平野部、海辺部においてアンケート調査を行い、地域による食品使用頻度の経年変化の差異から、食品使用に関する地域の特性について検討したところ、次のような結果が得られた。

1. 現在の食品使用頻度についてみると、山間部では魚介類の使用頻度が他の地域に比べて低く、海辺部では野菜類のうち果菜類の使用頻度が低いといった地域の特性が認められた。また、チーズ・ヨーグルトやバターはいずれの地域においても使用頻度は低かった。
2. 過去と現在との食品使用頻度を比較すると、各地域ともにごはん、いも類が減少し、肉類、魚介類、卵類、乳類の増加が認められた。しかし、その増減比には地域差がみられ、山間部で変化率が高く、海辺部では低かった。

以上のように、各地域に共通の変化とともに、地域ごとに異なる変化も認められた。

文 献

- 1) 松田延一：食生活水準の平準化傾向，pp. 1～75，米川印刷（1985）
- 2) 坂本元子，赤羽正之，高橋重磨，熊沢昭子，浜喜代治：栄養指導，pp.46～50，第一出版（1984）
- 3) 根岸龍雄，内藤雅子：食生活論，pp.25～28，同文書院（1988）
- 4) 熊沢昭子，東 愛子，松下ツイ子，三石禮子：栄養学雑誌，**44**，317～336（1986）
- 5) 大塚量子，堺みどり，笠松隆洋，宮下和久，潮見重毅，岩田弘敏：栄養学雑誌，**41**，379～389（1983）
- 6) 関千代子，君羅 満，岩瀬靖彦，高野美幸，高橋重磨，赤羽正之：栄養学雑誌，**42**，7～16（1984）
- 7) 高橋平八郎，熊沢昭子，西尾幸枝，神谷百合子，安瀬雅子：名古屋女学院短期大学紀要，**7**，102～108（1961）
- 8) 高橋平八郎，永井喜久子，安瀬雅子，江里幸江，西尾幸枝，開沢紀子，熊沢昭子：名古屋女学院短期大学紀要，**8**，80～86（1962）
- 9) 熊沢昭子，高橋平八郎，小野真知子，永井喜久子，安瀬雅子，江里幸江，西尾幸枝，尾茂田俊子，柴田瑞子，山田房子：名古屋女学院短期大学紀要，**9**，62～68，（1963）
- 10) 熊沢昭子，高橋平八郎，小野真知子，内島幸江，北川公子：名古屋女子大学紀要，**13**，91～98（1967）
- 11) 熊沢昭子，鈴木妃佐子，鶴飼美恵子，北川公子：名古屋女子大学紀要，**16**，119～128（1967）
- 12) 豊川裕之：日本公衆衛生雑誌，**15**，893～899（1978）
- 13) 浅野弘明，池田順子，永田久紀：日本公衆衛生雑誌，**32**，73～77（1985）
- 14) 須永 裕：日本公衆衛生雑誌，**32**，99～106（1985）
- 15) 森本絢美，高瀬幸子，秦 鴻，細谷憲政：栄養学雑誌，**35**，235～245（1977）
- 16) 厚生省保健医療局健康増進栄養課編：国民栄養の現状 昭和62年度国民栄養調査成績，pp.46～47，第一出版（1989）